

日支交通の研究 中近世篇 藤田 元春 著

昭和十三年四月十二日富山房發行
 菊版、四二三頁、圖版三葉、附圖
 三〇、定價參圓參拾錢

これは「日本地理學史」の著者なる三高の藤田教授が、前著述作の際、通觀された多くの日本圖より、日支交通の研究を進むるには先づこれらの地圖の示す處を參照せねばならぬことに想ひを到され、かくして地圖を中心として研究された日支交通に關する論文の中の中近世に關するものを集めて成された書である。從つてその内容は

一、元明時代の交通。二、シラの島及びゴールス
 三、琉球と南越。四、室町時代の遣明使。五、明人の日本地理。六、元和航海記航路の研究。七、御朱印船時代を語る古地圖と地理書。八、暹羅國行程及海路考。九、徳川光圀の北地探險と其船。十、日本海に於ける造船の發達。十一、日本人の用ひた航海用旱鍼盤。

の十一章より成つてゐて、その各自の間には必ずしも緊密な連關がないが、しかも概ね地圖の研究を主眼とされざる點に共通點がある。

論文の並列法には大體時代順によられ、上は鎌倉時代より下は徳川時代に至る。その第一章たる「元明時代の交通」は平和的な交通よりも元寇とその惹起した

倭寇について略述され、その結果として人々の看過した日本の地理乃至地圖の彼土への傳來をのべてをられる點、此書の趣を如實に表はしたものといつて宜からう。第二章「シラの島及びゴーレス」は嘗て史學雜誌に載せられた論文を補はれたる點が多いが、その結論に於ては異なる處なく、シラの島を新羅に比定されて、ユールが日本に比定したのを退けてをられるがこれは妥當であらう。ゴーレスの方は藤田教授の論文以前に既に秋山謙藏氏、前島信次氏等の論戰があり、特に秋山氏は最近の「東洋歴史大辭典」のゴーレスの項に於ても、琉球側の史料に基いた同氏の論斷から「ゴーレスを以て琉球人であるとするのは、漸く學界の定説となつたやうである」とされ、「一説に九州の南端に「コオリ」と呼ぶ處があり、此地方の人々が出かけたのはあるまいかと……云はれてゐるが」「探るに足らない憶説である」と一蹴されてゐるのに對して、後出の此書に於て藤田教授が相變らずゴーレスを日本人とし、その名の起りは薩摩の穎姓郡エフコホリの名に基くとの説を固執されてゐるのは注意せねばならない。而して特にその論證の重なるものとして一五五四年のモヒトの地

圖のゴール、一五八四年のルドヴィコ・ゲオルギオの日本圖のゴールの位置があることはやはり教授の學的態度を示すものである。この二圖の中、モヒトの地圖中のゴールは成程、教授の云はるゝ如くフェリオクを臺灣とするは正しく、從つてその北の二三の小島を大琉球とすればゴールは薩摩に當るものとなるわけであるが、もしこの中間の二三の島を宮古、八重山郡島にあてるとならばゴールは正しく琉球に當ることになるのではあるまいか。但しゲオルギオの方に見えたるゴールは全然その疑ひがないから、少くともこの圖によつて一五八四年に西人と日本のゴールなる地名の知られてゐたことは明らかになるわけである。この問題の起りとなるアルブケルケの傳記のゴーレスの記載は如何にも日本人に當はまる故、何としても日本人と論斷したい處に却つて難點がある。教授の所説はしかし概ね肯綮に中り、秋山氏の云はるゝ如く探るに足らない臆説ではあるまい。しかし藤田教授とても琉球人の南洋交通を否定されるわけではないので、それを示すのが第三章の「琉球と南越」であるが、此際もやはり裏爾たる琉球の冒險的通商の理由を日本、特に薩摩との

關係に於て見てゐられるのは、後代に於ても常に中繼貿易者でしかなかつた琉球貿易の正しい理解の仕方である。かく章を追うて紹介して行くことは中々楽しいことではあるが、紙數の關係より止むなく略して第五章の「明人の日本地理」、第六章の「元和航海記航路の研究」、第八章「暹羅國行程及海路考」等は編中にも最も教授の意を得られた箇所であり、南洋等の地名の比定に當つても必ずしも前人の糟粕を嘗めてゐられぬことを附記する。但し第五章中、比定に困りました肥前の榎津は筑後、端池は實は蓮池、迷坐骨知は筑後の溝口、肥後の國撤介烏喇は草部のことではなからうか。氣のついたまゝに記して教授の御參考に供する。

〔田中 克己〕